モーツァルトも ベートーヴェンもピアノ教師だった

～6人6様のピアノのレッスン

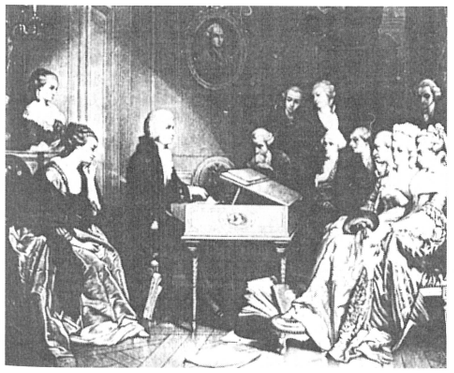
岳本恭治

たけもと・きょうじ●ピアニスト、音楽ジャーナリスト。武蔵野音楽大学ピアノ科卒業、国立音楽院ピアノ調律科卒業、英国トリニティ・カレッジ・ロンドン・ピアノソロ部門ディプロマを最優秀の成績で取得。演奏活動と共にピアノ構造学、改良史、奏法史の研究者として活躍し、講演、レクチャー・コンサートを国内外でおこなう。現在、日本J.N.フンメル協会会長、スロヴァキア・J.N.フンメル国際基金・文化遺産保護協会名誉会員。スロヴァキア・ベートーヴェン協会会員。国立音楽院講師。著書に「ピアノを読む」（音楽之友社）、「江戸でピアノを」（未知谷）など。

モーツァルト先生のレッスン

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

1786年、ヨハン・ネポムーク・フンメル（8歳）と父は、モーツァルトにレッスンをしてもらうために、ウィーンの家を訪ねました。その時モーツァルトはオペラ「フィガロの結婚」を作曲している真っ最中でした。モーツァルト（30歳）が「やあ、かわいいフンメル君、どこから来たの？　元気かい？　椅子におかけなさい。今日はどのようなお望みで来たのかな？　何か曲を弾いてくれるのかい？」と言うと、フンメルはあまりにも緊張してしまい、声も出せずにじっとしていました。「お父さん、私はピアノを教えることは好きではありません。作曲の仕事が忙しいので、大切な時間をレッスンに費やすことができないのです。でも、フンメル君にどのくらいの才能があるのか聴いてあげましょう。」フンメルは完璧に練習したJ・S・バッハの作品を弾き始めました。フンメルの父の横に座ったモーツァルトは腕組みをし、緊張した表情で聴いていましたが、しだいに目が明るく輝き、喜びに溢れ始めました。演奏の間、モーツァルトはフンメルの父に何度も好意的にうなずいてみせました。バッハを演奏し終わると、モーツァルトのむずかしい作品を初見で弾くように指示され、フンメルは見事に弾きこなすことができました。「坊やは私にまかせなさい。いや、まかせなければいけません。そして、坊やを私の家に住まわせなさい。お父さんは何も心配することはありません。」モーツァルトはフンメルに駆け寄り、頭をなでながら、「ブラボー、ブラボー」と叫びました。そして始まった内弟子生活では、モーツァルトは父のように、妻のコンスタンツェは母のようにフンメルの世話をしました。



モーツァルトは完璧なレッスンを行い、彼の出かけるところにフンメルを連れて行き、演奏させたり一緒に連弾をして正しい演奏法を教えました。翌年にはモーツァルトの主催でフンメル（9歳）のデビュー・リサイタルがドレスデンで開催されました。モーツァルトの作品の難しい箇所を完璧に弾きこなし、曲の途中でモーツァルトが拍手をするほどの素晴らしい演奏をしました。聴衆は彼の最後の優れた即興演奏が終わるやいなや、モーツァルトがステージに駆け上り、フンメルを抱きしめた光景を目の当たりにし、感動で胸をうたれました。リサイタルの後、モーツァルト先生はフンメルに、正しい練習方法で努力を続けることと、日常生活ではむやみに大きな音を立てたりしないこと、また指を大切にすることを指導しました。

ヨハン・ネポムーク・フンメル（1778―1837）はピアニストのルーツの一人で、ウィーン・アクション（典雅で軽快）の奏法とイギリス・アクション（重厚で音量が大きい）による奏法を統合し、モーツァルトのピアノ奏法を発展させ、ショパンへと引き渡した大ピアニスト兼作曲家です。

ベートーヴェン先生のレッスン

Ludwig van Beethoven (1770-1827)

生徒と協調するのが大の苦手で、若い頃から生徒へのレッスンに嫌悪感を持っていました。ベートーヴェンはウィーンの市民に街角で観察されていることを知っていたので「機嫌の悪いロバ」のように出かけ（この場合は出稽古）、気分の乗らないときは生徒の邸宅まで行っても、向きを変えて自分の家に走って帰ってしまうこともたびたびありました。そのような時はワン・レッスンが1時間ほどでしたので、翌日に2時間教えると約束しました。さて、ベートーヴェンがチェルニー（10歳）に行ったレッスンでは、C・P・E・バッハの「正しいクラヴィーア奏法」を使い、まず全調のスケールをさらわせ、正しい手の置き方や指、とりわけ親指の使い方を教えました。次に、この教本にある練習曲を次々と一緒に弾き、レガートの技術を教えました。

一方、ベートーヴェンが貴族の令嬢で彼の《月光ソナタ》を献呈し、愛情も抱いていたジュリエッタ・グィチャルディには、どんな小さいミスも許さず、またむずかしい部分が正しく演奏できるようになるまで厳格に指導しました。さらに後年、大ピアニストになったフェルディナント・リースには、速いパッセージや遠くに跳躍するところでミスをしてもほとんど怒りませんでしたが、クレッシェンド等の表情や、その曲の様式を間違えると怒鳴りました。それは音のミスは偶然に起こるが、曲の様式の間違いは知性、感性、注意深さに欠けているからです。最後にベートーヴェン自身は軽い弾き方（ウィーン式アクションのピアノを演奏するのに必要な軽快で繊細なタッチ。決して鍵盤を浅く押すというタッチではない）を尊重していたことを強調しておきましょう。

チェルニー先生のレッスン

Carl Czerny (1791-1857)

1806年15歳で初めて弟子を取り、45歳でピアノ教師をやめるまで、1日のすべてがレッスンに費やされました。特に1816年頃は朝8時から夜8時までのほぼ12時間レッスンを行い、貴族や上流家庭の家にも出稽古に行っていました。収入はとてもよかったようですが、健康を害することもたびたびあったようです。みなさんにとっておなじみの「練習曲」は、1日のレッスンが終わった後に作曲されました。

チェルニーは1821年、31歳のとき、10歳のリストを教え始めました。リストには楽譜を無償で与え、レッスンも無料で行いました。レッスンは毎日夜に行われ、リストはチェルニー家で寝起きをしました。これほど勉強熱心で才能豊かな生徒はいませんでしたが、基本的テクニックがなおざりにされていたので、最初の1ヵ月は全調の音階を徹底的に教え、次にクレメンティの練習曲を使ってこれまで彼に欠けていた拍子の正確さ、むらのないタッ

チ、美しい音色、正しい運指、曲にあった歌わせ方を教えました。リストは数ヵ月後には、テクニックは全く問題なく、作曲家の精神を把握することができました。また、できる限り早く暗譜をすることを心がけたので初見がきくようになり、さらに即興演奏を身につけることができました。

1822年、リストは公開の場で演奏を行い、ウィーンの人々を熱狂させました。また翌年、リストの父親が一儲けをたくらんで息子の公開演奏会を次々と開いたときには、フンメルの協奏曲、モシェレスの変奏曲、フンメルの七重奏曲、リースの協奏曲、チェルニーのかなりの数の作品（練習曲以外の）を演奏し、さらに聴衆がリクエストする主題で即興演奏を行うことができました。しかし、チェルニーにとってこれからさらにレッスン（特に作曲の）をしようと思った矢先に、リストの父親が金儲けのために演奏旅行に連れて行ってしまったことを残念に思っていました。演奏旅行中、リストは毎日2時間を指の練習に、1時間を初見演奏にあてていましたが、チェルニーはリストの歩みだした人生が気にいらず、もっと長い期間自分のもとでレッスンを受けていれば、もっとすばらしいピアニストと作曲家になったと晩年に語っています。

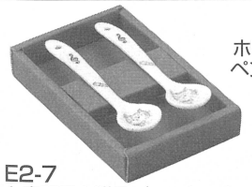
その後、チェルニーは恩師ベートーヴェンから甥のカールのレッスンを依頼されました。ベートーヴェンはチェルニーに「カールには腹を立てないで、できる限りしんぼう強く接してください。さもないと今以上に練習をしなくなってしまいます。愛情を持って、厳しくレッスンをしてください。そうすれば現在の不利な状態でも多少は演奏がうまくなると思います。レッスンでは次の点を教えてやってください」と頼んでいます。そのレッスン内容とは①初めに正しい指使いと拍子を教える、②楽譜を大方間違えなく弾けるようになったら表現法を教える、③演奏途中に小さなミスがあっても止めずに最後まで弾かせ、終わってから先ほどのミスを指摘する、というものでした。

メンデルスゾーン先生のレッスン

Felix Mendelssohn-Bartholdy (1809-1847)

1843年34歳のとき、ライプツィヒ音楽院を開校し、院長になりました。教授に恩師のモシェレスやシューマンを招聘しました。メンデルスゾーン自身のピアノと作曲の上級クラスの授業は、毎週水曜日と土曜日にそれぞれ2時間行われました。ピアノ・クラスでは一人ひとり順番に演奏させ、悪いところがあると克明に説明し、学生がわからないままにしていることを絶対に許しませんでした。学生の演奏においてどんなに小さいミスでも激怒し、気の小さい学生は常に震え上がっていなければなりませんでした（レッスン時のメンデルスゾーンは一般に思われている銀行家の御曹司の印象とはかなり違うようです）。また楽譜どおりに演奏しない学生には、「そのようなことは書かれていない!!」と怒鳴り、あきらかに練習をさぼったためにむずかしいパッセージが弾けない学生には「So spielen die Katzen」（そんな弾き方は猫の弾き方だ!!）と侮辱しました。一方、うまく演奏できなくても地道に努力している学生には、明確に、わかりやすく、何度も説明し、弾けるようになった時は賞讃の言葉をかけてあげました。メンデルスゾーン先生のレッスンはピアノ協奏曲やピアノを含む室内楽が中心で、基礎的な指の訓練はルイス・プレディ（1810〜74）やエルンスト・フェルディナント・ヴェンツェル（1808〜80）に師事させました。みなさんもプレディの練習曲は日本版で手に入りますので、是非お試しください。

発表会記念品　贈って喜ばれます…



E2-7
ト音記号と猫スプーンセット
¥630（税込）

E3-7
ホワイトコンクール
ペン立て（メモパッド付）
¥788（税込）

E3-3
ミュージカルエンジェル
フォトフレーム
¥998（税込）

E8-2
ト音記号
トロフィーS
¥1,155（税込）
（1個でも名入れ可）

●カタログ送付（無料）<約150点>　●直接販売・割引あり　●椅子専用カタログあり

ピアノフレッシュセンター　MK係
〒154-0011 東京都世田谷区上馬4-27-22 教育楽器ビル3F
TEL. 03(3410)9852　フリーダイヤル（FAX専用）0120(11)4269
ホームページ http://www.PianoFC.com

2点とも『ショパンのピアニスム』（加藤一郎著／音楽之友社）より

ショパン先生のレッスン

Frederic Chopin (1810-1849)

ショパンは1831年にパリに移住してから、毎日5〜6人の弟子を1レッスン45分〜1時間の割合で、全精力を傾け教えました。1レッスンは20フランで、出稽古は30フランを受け取っていました。これはパリのピアノ教師の中で最高額でした。弟子に対する要求は非常に高く、厳しいレッスンが行われ、泣いてしまう弟子も少なくありませんでした。ショパンが怒って椅子を壊したり、しろうとを教える時には一箱の鉛筆を持ち、怒りをまぎらわすために1本1本折ることもありました。しかし生徒たちは先生を心から慕い、恨みを抱くようなことはありませんでした。生徒を自分と同じ水準に高めようとすることと、ひとつのパッセージを完全に理解するまで繰り返し練習させることは、ショパン先生が生徒の上達を真剣に願っている証拠であるということを、生徒たちは十分に理解していたからです。レッスンが何時間も続けられ、生徒も先生もへとへとに疲れきってしまうこともしばしばあり、曲の2〜3小節のみでレッスンが終わることも少なくありませんでした。またレッスンの時、生徒には演奏会用のグランドピアノを使わせ、ショパン自身はプレイエルのアップライトピアノを使用しました。

●ショパンの主なレッスン内容

・手の硬さを取り除き、柔軟性と各指の独立性を習得させ、知性と集中力を持ってさらわせる。

・さまざまなタッチを徹底的に練習させる。

・音階練習は朗々とレガートで、ゆっくりからごく僅かずつテンポを上げていき、メトロノーム的平坦さを持って弾かせる。

・音階はロ長調、嬰ヘ長調、変ニ長調を最初に練習させ、最後に最も難しいハ長調を勉強させる。

・音階やアルペッジョでは各指の力の平均化と親指の回転を自由にすること。肩の力を抜き、肘をゆるくたらし、鍵盤に沿って手を滑らかに動かす。

・教材はクラマー、クレメンティ、モシェレスの練習曲、J・S・バッハのフランス組曲やイギリス組曲、平均律クラヴィーア曲集、フィールドのノクターン、ショパンのノクターン等。

・正しいフレージングを守ること。間違ったフレージングとは、自分にまったくわからない外国語を一生懸命暗記し、アクセントの位置を無視したり、言葉の途中で切ってしまうものだと説明した。

・指使いを書き入れること。ショパン自身も労を惜しまず書き入れ、ピアノ奏法の新機軸を生み出していった。

・「黒鍵に親指を使う」「親指を小指の下に潜らせる」「同じ指を黒鍵から隣の白鍵にすべらせる」方法を教えた。

・クレッシェンドやデクレッシェンドの変化のさせ方に細心の注意を払わせた。

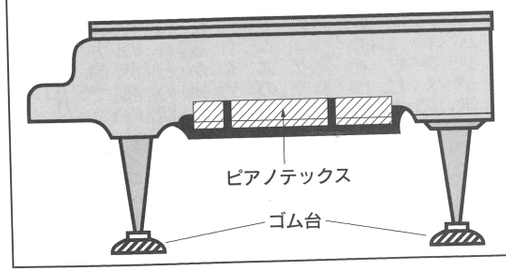
リスト先生のレッスン

Franz Liszt (1811-1886)

リストは17歳頃から貴族の女性にピアノを教えていましたが、生徒とよく

著名ピアニストも使っている ピアノテックスと防音・耐地震ゴム台

■竪型用もあります



●6帖で250万円位の防音費が数万円でOK!!
●特許の助響板が音量音色で理想的処理。
●当社のゴム台は音色もクリアにします。

グランドピアノ用
ピアノテックス　¥54,600（税込）（C2,C3用）
ゴムマット（1台分）¥8,820（税込）・¥15,750（税込）
竪型ピアノ用
ピアノテックス　¥49,350（税込）
（竪型、グランド型共取付費別途）

PP印金属板入りゴム台

【黒・茶 2色】
地震・防音兼用型／防音専用型
¥16,275（税込）〜／¥10,395（税込）〜

カタログ及び資料をお送りいたします。直販もOKです。
教育楽器販売株式会社
住所：〒154-0011 東京都世田谷区上馬4-27-22
電話：03(3410)8009　FAX（フリーダイヤル）：0120(11)4269
http://www.Kmusik.net
http://www.piano-kids.com

恋愛関係を結んでしまう先生でもありました。ここでお話しするのは晩年の1869年58歳から亡くなる75歳までのワイマール、ブダペスト、ローマで、世界中から集まって来た弟子（すでにピアニストとして活躍している人も含む）のために、1週間に3回レッスンを行っていたときの内容です。レッスンは10人ほどでクラスを形成し、午後4時から6時までのほぼ2時間行われました。生徒たちは集まると、テーブルに自分の演奏する曲の楽譜をすべて置き、リストはその楽譜の中から曲を選んで、生徒を指名してレッスンが始まりました。したがって全員がその日のレッスンが受けられるとは限りませんでした。アメリカから来たアミー・フェイ（1844～1928）という女性のピアニストは「レッスンのある日は朝から4時間練習するため、神経が疲れて食欲無く、ランチも取れなかった。そしていつも、レッスン室では考えもしなかったことが起こる」と書き残しています。レッスンの時、リスト自身が演奏することはあまりなく、演奏の出来が悪くともそれほど怒りませんでしたが、リスト先生の言ったことがすぐに飲み込めず、何度も弾きなおしをする生徒には、「恥さらし、音楽院で勉強しなおしてこい!!」と怒鳴りました。

ブラームス先生のレッスン

Johannes Brahms(1833-1897)

1872年にシューマン（1856年没）の妻クララは、娘のオイゲニエのピアノの指導をブラームスに頼みました。週2回、ブラームスはオイゲニエの家を訪ね、レッスンをしました。ブラームスはたくさんのテクニックの練習曲を使い、特に親指の訓練を徹底的に教えました。ブラームス自身は、手首の力を抜いて、他の指を丸め、親指を鍵盤の上にほうりなげるように弾きました。大変強い打鍵でしたが音は柔らかく豊かでした。特に、親指と他の指の交差練習をオイゲニエに毎日課しました。この親指の訓練はブラームス風ハノンと呼ばれている「51の練習曲」で徹底的に展開されています。ゆっくりしたテンポで始め、だんだん速くしていく練習で、オイゲニエは「指がしっかりし、しなやかになり、大変有効だった」と語っています。ブラームスは「練習曲は軽く、そしてできるだけ速く弾かなければならない」と言っています。またJ・S・バッハの作品では、リズムにとても注意を払い、同じ音型では常に同じアクセントをつけることを原則とし、強い打鍵ではなく重い圧力で弾くように示唆しました。アクセントのつかない音符はより軽く弾き、かつ強弱をつけるように言い、ポルタートは使うがスタッカートは使わせませんでした。メロディとなる音は、レガーティッシモでしかも極めて軽く弾かせました。スラーを書き込むように指示しましたが、リズム上のアクセントはその音型の中にあるとして、何の指示が無くても正確に弾くようにと指導しました。スラーでつながれた一つのフレーズを弾く時は、途中で手を上げたり下ろしたりせず、リズムにしたがって圧力をかけることと、陰影のつけ方等でコントロールさせました。複数の声部のシンコペーションでは、他の音との関連でどのような不協和音になるか弾き分けるように言っています。オイゲニエのレッスン教材は、ブラームスの「51の練習曲」、クレメンティの「グラドス・アド・パルナッスム」、バッハの「フランス組曲」「平均律クラヴィーア曲集第2巻」、スカルラッティ、モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、メンデルスゾーン、ショパンが使われ、シューマンの作品は不思議とありませんでした。

6人6様の「ピアノ教師像」を読者のみなさんにお伝えしましたが、すべての「ピアノ教師」に共通していることは、歴史的価値のある教材を使い、自己流ではない、ピアノの機能に即した合理的なテクニックを弟子たちに教えたことです。〝ピアノ教師1年生〟の先生方には、親や生徒に媚びることなく、安易な教材を使わず、合理的なテクニックを暖かい気持ちで指導していただくよう望み、エールを送りたいと思います。また、ここで紹介できなかったピアニストや内容については、拙著『ピアノ音楽史』および『ピアノを読む・改訂版』でご紹介いたします。ご期待ください。

天国のグルダもこれを聴いてきっと微笑んでいるはず

グルダを楽しく想いだす会

―アルゲリッチの協奏曲―

1月25日・サントリーホール
1月26日・ミューザ川崎シンフォニーホール
1月27日・すみだトリフォニーホール

●文＝横堀朱美（音楽評論）
●写真＝竹原伸治、堀田正矩

グルダの想い出にあふれた魅力のコンサート

ウィーンの伝統を継承する名ピアニストとして、早くから名を成すとともに、ジャズやロック、テクノや即興演奏にも積極的で、音楽を生き、音楽を呼吸して、そして、つねに〝音楽の自由人〟としての演奏を聴かせてきたウィーン生まれのフリードリヒ・グルダ（1930年5月16日～2000年1月27日）が亡くなって5年目の1月末、「グルダを楽しく想い出す会」が東京と川崎で開催された。

ブエノスアイレスの少女時代からグルダを敬愛し、ウィーンで教えも受けたマルタ・アルゲリッチが、「グルダを追悼し、グルダへの感謝を込めて、グルダに捧げるコンサートを」と提唱して実現したスペシャル・コンサートである。グルダが生涯モーツァルトを愛したように、プログラムには生誕249年のモーツァルトの作品の数々が取りあげられ、アルゲリッチはグルダが愛し、かつ得意としてきたモーツァルトのピアノ協奏曲を日本で初めて演奏した。グルダの二人の息子で、ピアニストのパウルとリコも登場して、アルゲリッチとともにコンチェルトを披露し、さらに加えてグルダのオリジナル作品もプログラムに取り入れるなど、グルダの想い出にあふれた魅力のコンサートとなった。

グルダの息子やカプソン兄弟が若さあふれる熱演を披露

1月25日サントリーホールでのコンサートは、モーツァルトが姉のナンネルとの演奏を念頭に書いた《2台のピアノのための協奏曲》をパウルとリコが共演して始まったが、26日ミューザ川崎シンフォニーホール、27日すみだトリフォニーホールでのコンサートは、幼い娘二人との親子三人で演奏するために、ロードロン伯爵夫人がモーツァルトに作曲を依頼した《3台のピアノのための協奏曲》を、アルゲリッチ、パウル、リコが共演するという春の夢のような演奏で幕を開けた。

2曲目以降のプログラムは3日間とも共通で、次に登場したのはフランスの若手ヴァイオリン奏者ルノー・カプソン。曲目はモーツァルトの《アダージョ》と《ロンド》。これら愛すべき小品を、ルノーは、こぼれんばかりの気品にみちた艶やかな美音と、淀みない流れにあふれた演奏で楽しませてくれた。

続いて、その5つ違いの弟で名チェロ奏者のゴーティエが、グルダの《チェロ協奏曲》を響かせた。独奏チェロと共演するのは、管楽器を主体にした小編成オーケストラだが、ときにドラムスやエレクトリック・ベース、ギターも交えたジャズ・ロック風の〝バンド〟を伴って、独奏チェロが華々しく